

2020年12月13日 説教「インマヌエル」

マタイの福音書1章18～25節

今朝はキリストの誕生の次第の一端をマタイの福音書から学びます。

1. ヨセフについて (18～19節)

- ①誕生の次第 (18) **「イエス・キリストの誕生は次のようであった。」** マタイの福音書はその冒頭で、アブラハムに始まり、ダビデを経て、イエス・キリストに至る系図が記されています。といっても、それはマリヤの夫となるヨセフに至るものです。血縁的には関係がないのですが、法的な意味において、イエスはヨセフを父として生まれたのですから、その系図は意義深いものなのです。イエスの誕生はその面で、他には決してない特別のものでした。
- ②身重になり (18) **「その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりはまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。」** そのヨセフは婚約していました。その相手は、ナザレの村に住むマリヤでした。まだ十代であったと思われる女性です。ところが、彼らがまだ結婚する前に、許嫁であるマリヤは妊娠したのです。ここにもあるように、彼女は聖霊によって身ごもったのです。このことの経緯については、ルカの福音書1章に詳しく記されています。マリヤのもとに御使いが来て、受胎の告知をしたのです。男性を知らない彼女は戸惑いましたが、御使いは聖霊によって身ごもること、神には不可能はないことを伝えました。彼女はそれを受け入れました。やがて、彼女は御使いの御言葉通り、身ごもったのです。
- ③ヨセフの思い (19) **「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。」** さて、一方の許婚者の夫であるヨセフは正しい人でした。これは律法に全く反することをしなかったという意味ではありません。神に全幅の信頼をおいて歩む、信仰深い人であったという意味です。彼は婚約者のマリヤを愛していました。彼女が人々から律法違反だと誹謗中傷されることを避けたいと思いました。そこで、彼女をこの地から離れさせて、さらし者にならないようにしようと思ったのです。

2. 御使いからのメッセージ (20～22節)

- ①主の使いがヨセフに (20) **「彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ。恐れなくてあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。』** しかし、ヨセフにも主の使いは現れたのです。彼はその時、いろいろと思い巡らし、決断をつけられずにいました。御告げの呼びかけは、「ダビデの子ヨセフ」でした。彼が選ばれたということを見せつけるためでした。続いて、「恐れなくて、妻マリヤを迎えなさい」と伝えられました。そして驚くべきことは、その理由は胎内の子は聖霊によって身ごもったからだだと伝えられたことでした。

②男の子を (21)「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」さらに、マリヤが産むのは男の子であり、名前をイエスとせよとまで伝えられたのです。イエスというのは「主は救い」という意味です。そしてその方が、民を罪から救って下さるといふのです。生まれてくる子が、人々を罪から救い出すことになることと知らされて、ヨセフは二度びっくりしたことでしょう。

③預言が成就し (22)「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。」イザヤ書やミカ書や詩篇などには、メシヤの誕生預言がたくさんあります。まさに、預言されていたことが、具体的に成就することとなったのです。主は時を越えて、ことを成してくださろうとしていたのです。

3. キリストの誕生 (23~25 節)

①神はともに (23)「『見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)」これはイザヤ書 7 章 14 節の預言です。処女マリヤが身ごもることはイエス誕生の 700 年以上前に預言されていたのです。その名はインマヌエルと呼ばれると伝えられたのは、救い主の存在の意味について知らせる目的でした。つまり、その意味は神が共におられるというものでした。すばらしい神の恵みが、この出来事の中に表わされようとしていたのです。

②妻を迎え入れ (24)「ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、」受胎の告知を受けた時に、マリヤは「お言葉通り、この身になりますように」と信仰告白をしました。今、眠りからさめたヨセフは、主の使いより促しを受けて、どうしたでしょうか。マリヤの許婚者ヨセフは、ついにそのお言葉に従いました。つまり、彼はマリヤを去らせることなく、マリヤを妻として迎えたのです。信仰において、重要な一つは、主の御言葉に従うということです。ヨセフはそれを実行したのです。

③イエスと名づけ (25)「そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。」ヨセフは、マリヤとの結婚生活に入っても、その胎内の子が生まれるまでは、マリヤを知ることはありませんでした。マリヤへの配慮でした。そして、時満ちてマリヤは子供を出産しました。命名の時には、御使がマリヤに直接言われ、ヨセフにも間接的に言われた「イエス」という名前をつけたのです。彼らは若い信仰者でしたが、まさに御言葉(預言の言葉)に忠実に歩んだのでした。

《結論》

主の使いから受胎告知を受けたマリヤは、はじめ大変に驚きましたが、「神には不可能なことはありません。」と告げられて、「お言葉どおり、この身になりますように。」(ルカ 1:38)と告白をしています。一方、マリヤの許婚のヨセフは、別の意味で戸惑いました。なにしろ、結婚する予定の女性が身ごもったというのですから。マリヤを非難する方向に進みやすいところでしょう。ところが、彼は信仰深く配慮のある人でした。その事態を受けて、マリヤを秘かに去らせてあげようと考えたのです。そんなヨセフのもとにも、眠りのうちに、主の使いがやってきて「マリヤは聖霊によって身ごもったのです。彼女を妻として迎えよ」と促したのです。しかも、生まれてくる赤ちゃんの名前まで指示されたのです。ヨセフの心の中を察すると、御使いが来る前には大変な葛藤があり、御告げを受けた後にもまだ、迷いのようなものがあったのではないのでしょうか。

今年の私たちの教会の御言葉は「いつも喜んでいなさい。」です。一方、私は個人的には、第一コリント 13 章を自らの霊的テーマをするようになりました。愛の章に教えられている神の愛(アガペー)については、こういう愛があつて、これはキリストによってのみ実践されたものと理解してきました。お伝えしてもきました。しかし、これを御霊の助けをいただきながら、少しでも実践できるものとさせていただきたいと願わされるようになりました。律法的に頑張つて実践しようとするのではなく、こういう愛をいただいきたいと願わされるようになったのです。

ところで、この 13 章の視点からすると、ヨセフは御告げを受ける前から、マリヤを配慮する心に導かれていました。寛容な心、妬まず、怒らず、人のした悪を思わず・・・もちろん、その時代にコリント書はありません。旧約の律法から、愛を教えられ守ろうとしたのでしょうか。でも、やはり彼にとって、この事態を受容するのに決定的だったのは、「インマヌエル」というお言葉ではなかったでしょうか。神がともにいてくださるという、このお言葉がヨセフの心を貫いたのではないかと思います。これまででも信仰を持って歩んでいたヨセフですが、「インマヌエル」なる方がお生まれ下さるといふことが、彼の背中を押したのだと思われます。ヨセフはマリヤを妻とし、その後も誠実に歩んだのも「インマヌエル」が確信できたからでしょう。

「いつくしみ深き、友なるイエスは」(讚美歌 312)、この讚美歌で主イエスは友であることを歌いますが、友として共に歩んでくださることも歌っているのでしょうか。生まれて来て下さった主イエスは、「インマヌエル」、共にいてくださる神です。私たちも、救い主が共にいてくださることを信じましょう。この方に期待しアドベントの日々をさらに歩いていこうではありませんか。

